日本語スピーチコンテスト実態と課題

金久保紀子*

A Study on the Current Situation and Issues of Japanese Speech Contest

KANAKUBO Noriko*

抄　録

国内外で多様な主催者によって実施されている日本語スピーチコンテストを分析した。海外における日本語スピーチコンテストが、評価基準の明確化、スピーチ指導の加重な負担の軽減などの問題はあるにせよ、参加者にとっても主催者にとってメリットがある状況で行われている。一方、国内で行われている日本語スピーチコンテストは、主催者や聴衆に対してはメリットがあるものの、参加者にとって日本語教育上、生活上のメリットがある機会になっているとは言えない。

国際理解や交流という段階を超え、多文化共生社会実現の一つの方策とするために、新しいタイプの日本語スピーチコンテストも模索されている。今後は、参加者を市民としてとらえ、より積極的に提案や意見を聞く工夫が、国内の日本語スピーチコンテストには求められている。

キーワード：日本語スピーチコンテスト、多文化共生社会、日本語力の向上、審査基準

1．はじめに

外国語として言語を学んでいる学習者は、学習するに当たって何らかの目的と目標を持って取り組んでいる。また、一般的に、学習者にとって学習成果を発表する機会は、学習動機を高く保つために役立っていると考えられている（北尾（1991））。

日本語の学習者にとって、学習成果を広く発表する機会のひとつとして、日本語スピーチコンテストが挙げられる。日本語スピーチコンテストは、日本ばかりでなく世界中で開催されているが、その形態や評価方法については、多くの課題があることが報告されている。

筆者が、日本語スピーチコンテストに興味を持つに至った理由は２つある。ひとつは、筆者が地域の国際交流協会に協力して、日本語教育関連の行事の企画・運営に携わってきたことが挙げられる。もうひとつは、外務省の関連団体である日露青年交流センターが実施している、日露青年交流日本語教師派遣事業で、ロシア国内各地の大学等で日本語教育を行う若手日本語教師に対する赴任前研修で

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

の経験である。そこでは、新規に派遣が決まった若手日本語教師と、２年・３年続けての派遣となっている日本語教師が共に赴任前研修を受けている。その研修で筆者が担当したのがスピーチコンテストの指導にかかわる内容であった。その研修での数年に渡る若手日本語教師とのやり取りを通して、各地における日本語教育において、日本語スピーチコンテストの持つ意味合いがずいぶん異なることに注目した。

２つの経験を通して、日本国内で日本語教育に従事しているものとして、国内における日本語スピーチコンテストの役割を捉えなおす必要性を強く感じた。

日本語学習者にとっては、日本語の実力を試すためのよい機会であるはずの日本語スピーチコンテストの実態はどのようなものなのだろう。本稿は、実際に行われている日本語スピーチコンテストの実態を検討しながら、日本語スピーチコンテストの持つ意義や役割について考えることを目的とする。特に、日本に中長期間在留する外国人から見た国内での日本語スピーチコンテストが持つ役割について考察を加えることとする。

なお、本稿では、参加者である日本語学習者が一同に集まり、自分の意見をある程度の時間一人で話す時間が確保された形式のものを日本語スピーチコンテストと呼ぶことにする。

２．日本語スピーチコンストの持つ課題と問題点の整理

ここでは、先行研究で指摘されている日本語スピーチコンテストの課題などを整理する。

日本語スピーチコンテストを対象にした研究は多くはない。学習者の考えをまとめて述べる活動としてのスピーチについて、土岐（2001）は、スピーチはそれを聞いてくれる相手のためにするもの、という意識の重要性を指摘し、スピーチの準備段階においては、４技能が表裏一体化している、とも述べている。

林（2010）は、授業内でのスピーチの指導の際に、「学習者が自分のスピーチには関心が高いが、クラスメイトのスピーチに対する関心度には差があった」と報告している。それを改善するために聞き手としての役割を気づかせる試みをした結果、聞き手としてだけでなく話し手としての態度にも変化が現れた、という指摘がある。

深澤・ヒルトン（2012）では、日本国内で実施される日本語スピーチコンテストと海外で行われる場合の違いを指摘したうえで、「海外におけるスピーチコンテストは、具体的な日本渡航の機会につなげられることから」日本語スピーチコンテストの役割として、学習者のモティベーション強化につながっているとともに、日本語学習の総まとめ的な機能を持つ、と述べている。

具体的な日本語スピーチコンテストに関する研究としては、深澤・陳・張（2012）と藤岡（2009）が挙げられる。

深澤・陳・張（2012）は、全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の事例を取り上げて、スピーチ指導を受けた特定の対象者は、話す能力、書く能力、聞く能力が全面的に高められたこと、特にその場で与えられた話題についてまとまった発話をする「独話」の能力が鍛えられたことが分かった。一方で、教員・学習者双方に過重な負担をかけることなく成果を出すこと、また実際の日本語スピーチコンテストでよい成績を収めた学生と出場もしなかった学生との関係など、クラス運営として、難しい課題があることを窺わせた。

藤岡（2009）は、アメリカ合衆国各地で実施されている過去の日本語スピーチコンテストを対象にした分析を行い、コンテストでの

審査基準が確立されていないことを問題視した。

先行研究は以下のようにまとめられる。

・（海外における日本語スピーチコンテストでは）あるテーマについて自分の考えをまとめ、聞き手を意識しながらスピーチという形で発信できる段階まで学習者の学習を進めることで、学習者の日本語力の向上に大いに寄与している
・スピーチコンテストへの取り組みへの意識は、学習者と教員、出場する学習者としない学習者とで差がある
・実際のスピーチコンテストにおいて、どのような評価基準があるのか、それを公開するのか、など運営面での改善が必要とされる

日本語スピーチコンテストが、日本語学習者の日本語力の向上に寄与することを、出場する学習者、出場を呼びかける教員側双方が十分に意識することは重要であろう。課題として、スピーチコンテストの運営側としては、評価方法や基準をわかりやすくすること、スピーチコンテストと普段の日本語教育とのバランスを考え、出場する学習者としない学習者双方にとって、学びとなるような工夫が必要であることが挙げられる。

さらに、すでに予想されていたことではあるが、海外で実施される日本語スピーチコンテストと国内の日本語スピーチコンテストのあり方の差はやはり大きい。海外の場合は、日本語に接触する場面が限定的であることが特徴である。それを克服するためにも、日本語教師との良好な関係を維持し、利用しながら、日本語スピーチコンテストへの出場と優秀な成績を目指すことが学習者にとって高いモチベーションにつながることは理解しやすい。しかしながら、日本国内では、日本語学習者は常に日本語と接触している状況であるので、日本語との接触を増やすため、という理由は成立しにくい。

3．海外における日本語スピーチコンテストの事例研究

海外での日本語スピーチコンテストの実態を知るために、一事例として、ロシアでの日本語スピーチコンテストについて分析する。広大な国土があることから、地方大会も大変盛んで、ロシアおよびCIS諸国[1]で行われる日本語スピーチコンテストは、「スピーチコンテスト」ではなく、「日本語弁論大会」と称されている。

3－1　ロシアおよびCIS諸国での日本語教育

ロシア国内には、高等教育を中心に11,401人の日本語学習者がいる[2]。CIS諸国にも、50名程度から500名ほどの日本語学習者が、特に高等教育機関で日本語を学んでいる。

現地のノンネイティブの日本語教師のほか、日本国内機関[3]から日本人日本語教師が大学を中心に2年ほどの期間で派遣されている場合が多い。

日本語教師養成を行っている大学もあり、ロシアでは初等中等教育でも2007年から日本語教育がスタートしている。一方で、政府による大学の統合・改編も次々実施される関係で日本語学科がなくなる場合もある上に、一般的な大学卒業者の就職難の影響を受け、経済的に発展している中国との関係を見越して、中国語に人気を取られる傾向も見受けられる。

3－2　モスクワ国際学生日本語弁論大会

モスクワ国際学生日本語弁論大会（以後、モスクワ大会）は、1988年にスタートした日本語スピーチコンテストで、ロシアおよびCIS諸国で日本語を学習する大学生にとっては、国内でもっとも権威ある大会である。

モスクワ大会の目的は、第28回大会（2015）の開催要項によると、

ロシアおよびその近隣諸国で日本語を学

習する大学生が、日頃の学習成果や自らの考えを日本語で発表する場です。本大会の開催を通して、学習意欲の向上、学生・教師間のネットワーク化および教育現場と各地の日本社会の親交と相互理解の促進を目指し、ひいては当該地域の日本語教育の水準向上と活性化を図ることを目的とします。

とある。つまり、「学習成果」発表の場であると同時に、ロシアおよびCIS諸国内の日本語教育関係者のネットワーク化、日本語教育そのものの質の向上も目指した大会となっている。

モスクワ大会の出場資格は、以下の条件を満たした上で、各地の予選会[4]で優秀な成績を収めた者、あるいは国際交流基金が実施する原稿審査（ロシア国内のみ対象）により出場を認められた者となっている。

＜出場資格＞

（1）ロシアまたは周辺諸国の大学、もしくはこれに準ずると主催者が認定する機関で日本語を学んでいる大学生（日本語専攻である必要はない）

（2）日本語を母語とせず、日本滞在期間が通算90日以内であること

（3）過去本大会に出場して6位以内に入賞したことがないこと

＜ルール＞

（1）1人5分以内の発表（原稿の持込は不可）を行い、質問者の質問2問に答える

（2）テーマ、文体は自由

（3）スライド、小道具等の使用は一切不可

（4）論旨の明確さ、主張内容の深さ、独創性、発音、プレゼンテーション能力、質疑の日本語力、質疑の的確さを評価点とする。各評価点の合計得点及び審査員による合議の結果、順位を決定する

＜優勝賞品＞

日本航空及びエムオーツーリストCISロシアセンターの協賛による訪日研修

＜参加者＞

11カ国20名の学生

＜関連行事＞

同会場で、日本語を学習する学生向け企業説明会を開催。

参加企業：三井物産モスクワ、日本国空、日立建機など

＜協賛＞

日立・伊藤忠・日本航空・みずほ銀行・三菱・丸紅・パナソニック・セイコー・ヤマハ等日本企業

以上の状況を見ると、モスクワ大会開催の目的は、個々の学生の日本語能力向上と日本語教育の水準を上げることとあるが、日本企業にとっては、日本語能力が高い優秀な学生と会える場であり、参加する学生にとっても、優勝すれば日本での研修の機会を得られ、かつ、自分の就職活動としてもかなり重要な場であることがわかる。また、大学間のよい意味でも競争意識も働き、イベントとしては十分に成立しているように見受けられる。つまり、学習者(参加学生)･スポンサー･大学、どの立場からみても益のある大会となっているのである。

一方で、参加学生への負担、また実際に学生の指導を担当する教師（多くの場合若手の日本人教師）の準備にかかる労力は小さくないことが想像できる。5分という時間を、スライドなどの補助的なものなしに、スピーチする練習には膨大な時間がかかるであろう。また、スピーチは練習で上達することができるが、質疑応答は即興で答えなければならないので、準備や対策は難しいだろう。

また、今回調査した範囲では不明だったことに、出場する学生への日本語に関するフィードバックの有無が挙げられる。日本企

業との出会いというメリットはあるものの、スピーチそのものに対するフィードバックが弱くては、その後の日本語学習の促進を助けているとは言いにくい。つまり、モスクワ大会の目的を十分に達成しているとは言いにくい。さらには、出場しない学生に対する日本語教育の質の保証という課題も残る。応援や見学を目的にモスクワ大会に連れて行く、ということも考えられるが、交通費の負担など考慮すべき課題は多い。結局、日本語スピーチコンテストについては、かなり限定的な教育効果しか得られないのではないか、ということも懸念される。

また、藤岡（2009）と同様に、ロシアでの大会においても、評価基準についてはおおまかな評価項目が明らかになっているだけで、詳細はわからない。さらに、成田他（2010）が提案したような新たな評価基準を取り入れているとは考えにくい。

日本語を学ぶ学生にとって魅力的な大会で、学生の積極的な参加が見込めないかぎり、大会を運営する大学側や現場の教員に大きな負担を強いるだけで、安定した継続開催は可能ではなくなる。また、日本企業との連携を強化しながら「就職」というキーワードだけで学生にアピールするのか、あるいは、国土の広さを考慮すると、モスクワ大会だけでなく、地方大会を充実させ、チャンスを広げる方策を考えるのか、さらに魅力的な大会とするための方策を考える時期も近いだろう。今後も、日本とロシアとの関係、またロシアに進出する日本企業の動向も見ながら、モスクワ大会の実施状況を注視していきたい。

ロシア以外の国、たとえば、中国の大きな大会である「全中国選抜スピーチコンテスト」にも、数多くの中国・日本の企業がスポンサーとして協賛しており、主催は日本経済新聞社である。中国国内での予選を勝ち抜いた学生は、日本での本選に臨む、という特別な経験ができるシステムとなっている。

この事例も見ても、海外で開催される、大学生を対象とした日本語スピーチコンテストには、日本の企業との結びつきという点において特別な役割もあることがわかる。

4．国内における日本語スピーチコンテスト

国内各地では、日本語スピーチコンテストが数多く実施されている。ここでは、大会の主催者別に３つに分けて考察する。

1）全国的な日本語スピーチコンテスト

日本国内でもっとも大きな大会である「外国人による日本語弁論大会」（以後、NHK日本語弁論大会）を取り上げる。この大会は、一般社団法人国際教育振興会および国際交流基金と開催地である地方自治体が主催する毎年１回各地を持ち回りで実施される大会で、決戦の様子はNHKでも放送されている。

2）地方自治体による日本語スピーチコンテスト

県や市が主催する日本語スピーチコンテストは、ほぼ全国的に実施されている。外国人居住者が多い東京都内では、区が主催して行われることも多い。

茨城県では、表１のように日本語スピーチコンテストおよびそれに類する会が実施されている[5]。

3）その他の団体による日本語スピーチコンテスト

大学、NPO/NGO、公益財団法人による日本語スピーチコンテストがある。中には、大学が主催であるが、全国規模で実施されている「全日本留学生日本語スピーチコンテスト」のような会もある。

4－１　日本語スピーチコンテストの目的とテーマ

国内における日本語スピーチコンテストを

表１　茨城県内の日本語スピーチコンテスト実施状況

団体	名称	主催者	備考
県	外国人による日本語スピーチコンテスト	茨城県国際交流協会	年１回　15名参加
市	日本語スピーチコンテスト	鹿嶋市交際交流協会	年１回　11名（2015年）参加
市	ウィンターフェスティバル	古河市国際交流協会	中学生による海外派遣報告会・外国人による日本語スピーチを合同開催
市	スピーチコンテスト	つくば市国際交流協会	

考えるために、目的・テーマにどのようなものがあるかを概観する。

1）全国的な日本語スピーチコンテスト

NHK日本語弁論大会の趣旨・目的は、以下のとおりである。

> 急速にグローバル化が進む現在、私たちが住む地球の豊かな発展には、国籍や文化の違いを越え、建設的な意見交換を行いながら、より一層の相互理解を深めることが大切です。日本の社会や文化に日頃から深く接している世界各国の人々に、日本語でスピーチをする機会を提供することは、それを聞くすべての人に対して、そして発表する本人に対しても、新たな視点を与えてくれる好機です。違いを知り、違いを楽しむことこそ、人類の平和共存・発展へ繋がるという想いから、（中略）開催いたします。

テーマは自由（伝道や宣伝に類するものは不可）で未発表のものに限り、６分以内に過度の演出をせずに発表する、という規定になっている。

この大会の特徴は、「相互理解」を深めることと、発表者・来場者双方にとって「新しい視点を与えてくれる好機」としていることにある。発表者の日本語力の向上については言及がない。

2）地方自治体による日本語スピーチコンテスト

茨城県国際交流協会主催の「外国人による日本語スピーチコンテスト」の場合は、以下のとおりである。

> 県内で生活している外国人の皆さんが日頃考えていることや、日本･茨城の印象、母国の話など、県民との相互理解を深めるテーマを日本語で発表し、異文化交流を促進するもの

テーマは国際理解を深める内容（政治的・商業的・宗教的宣伝・伝道でないもの）で、５分間のスピーチとなっている。

鹿児島県国際交流協会が主催する「～鹿児島で語ろう～第20回外国人による日本語スピーチコンテスト」（2015年１月実施）の場合は、以下のような目的を持つ。

> 鹿児島県在住の外国の方に、日本語で意見を発表する機会を提供することで、外国の方の日本語能力の向上を図るとともに、鹿児島の国際化を考える上で、国籍や文化の違いを越えた相互理解・国際交流を深め、多文化共生の社会づくりを目的とする

茨城県の特徴としては、「相互交流」「異文化交流」を前面に出しており、日本語能力の向上には言及していない。鹿児島県の特徴は「日本語で意見を発表する機会を提供すること」で「日本語力の向上を図る」と記したうえで、「多文化共生の社会づくり」を目的としていることを明言している。

3）その他の団体による日本語スピーチコンテスト

日本経済大学が主催している「全日本留学生日本語スピーチコンテスト」の大会趣旨は以下のように書かれている。

> 本学（日本経済大学）では、自らの考え、

思いを日本語で考え伝える力を養うことに重点を置いた教育を推進しています。本コンテストは、日頃の成果を発表する場として、2011年より開催し、内外に好評を得てまいりました。第５回コンテストも、本学学生のみならず、全国で勉学に励む留学生を対象とし、さらに世界に目を向け、世界に羽ばたく可能性を追求するものです。

また、以下①～④から選びテーマを選び、800字程度の作文をまず提出することが求められている。

①私のしあわせ
②私を変えた日本留学
③わが祖国自慢
④グローバル社会で生きるために必要なこと

この大会の特徴は、主催の大学の教育について、「日本語で考え伝える力を養うことに重点を置いた教育」であると伝えたうえで、出場者の日頃の成果を発表する場、としていることにある。

4－２　審査員と審査基準の公開

各日本語スピーチコンテストの審査員と審査基準の公開状況は、表２のようにまとめられる。

全国規模の大会では、審査員については公開しているが、審査基準については、NHK弁論大会以外では、詳細に公開しているところはなかった。

表２　国内日本語スピーチコンテストの審査員と審査基準

大会	審査員	審査基準
NHK日本語弁論大会	日本語教育専門家１名 有識者１名 日本語非母語話者１名 メディア関係（含むNHK）２名	①主題の良否（聴衆の興味と関心を呼ぶ時宜を得た主題であり、これを論ずる意義が認められるか） ②事例の適切さ（取り上げられる事例は主題を説明する上で十分かつ適切なものであるかどうか） ③内容の構成（独自の見方、考え方が適切に表現され、主題が論理的かつ効果的に整然と展開されているか） ④語句の使い方（主題、内容にふさわしい語句を選んでいるか、その発音、抑揚、文法は適切か） ⑤話し方（表情、動作などが自然で、好感が持て、かつ説得力があるか） （2015年度26カ国、81名の応募、予選審査の結果、11カ国、12名が本選に出場）
日本語スピーチコンテスト（茨城県国際交流協会）	日本語ボランティアおよび高校生の特別審査員と他の審査員	審査基準：非公開 予選あり （2014年度18ヶ国38名の応募、予選の結果12カ国15名が本選に出場）
～鹿児島で世界を語ろう～（鹿児島県国際交流協会）	予選： 日本語教育専門家３名 行政関係者２名 本選： 国際交流団体関係２名 大学関係者２名 行政関係者３名	審査基準：非公開 予選あり（2015年７カ国21名の応募、予選の結果５カ国10名が本選に出場）
全日本留学生日本語スピーチコンテスト（日本経済大学）	企業関係者　９名 行政関係者　１名 日本語教育専門家０名	1）予選　外部審査員による作文・動画の審査 2）決勝大会　外部審査員による総合的なスピーチ力の審査

4－3　国内の日本語スピーチコンテストの課題

国内の日本語スピーチコンテストは、趣旨･目的については、「国際理解･異文化理解･多文化共生社会」といったキーワードを持ち、現在、国内の自治体がそれぞれ持っている国際交流に関する指針・方針に則り、自治体にとって必要な行事と位置づけているとみることができる。

また、審査員や審査基準についての公開は進んでいるとはいえず、参加する学習者にとっては、どのような審査が行われているかは不透明であることは否めない。

審査基準は不透明であるが、多様な審査員が参加していることが明らかになった。審査員の多様性は重要である。日本語教育関係者の前では日本語が通じるが、他の日本人には通じない、といった経験を持つ日本語学習者は多い。多様な日本人に届く日本語を話すことを意識するためにも、さまざまな背景を持つ審査員がいたほうがよいだろう。

海外における日本語スピーチコンテストではかなり強調されていた、「参加者の日本語力の向上」についての言及はどの大会にもなかった。県や全国規模の日本語スピーチコンテストの場合は、企業が協賛しており、参加者に対して、豪華な賞品が用意されている。また聴衆の動員もしやすい、という利点もある。そのこと事態は大会参加への意欲を高める要素にはなっているだろう。しかし、賞品以外の、参加者に対するメリットは、純粋に自分の話を聴衆に聞いてもらえた、という点以外にはないように見受けられる。

つまり、主催者にとっては必要な行事となっているが、参加する外国人にとっては大きなメリットがないという状況に陥っているのではないだろうか。出場をすると、練習にかかる負担は大きい一方で、自分自身の日本語力を高めるというほどの手ごたえは得られていない可能性がある。一方、主催者や聴衆である日本人にとっては、異文化を持つ人からの新しい視点で日本社会や文化を捉えたおもしろい話が聞け、国際理解を深める場になっている、という図式である。

日本語スピーチコンテストの聴衆である市民はどういう意識を持っているのだろうか。その一端を探るために、地域の日本語ボランティアをしている、40代から70代の男女18名を対象に簡単なアンケート調査を行った[6]。

その結果、実際に日本語スピーチコンテストに出向いたことがある人は、８名、NHKなどで放送される日本語スピーチコンテストを視聴したことがある人が９名であった。日本語教育に興味がある人を対象にした調査であるが、会場に足を運んだ理由は、「教えたことがある外国人や知人が出場するため」がほとんどであった。その上で、「日本人とは違う考え方を聞きたかったから」と回答している。

また、一般的に日本語スピーチコンテスト

表３　日本語スピーチコンテストに期待していること（複数回答可）

項目	回答数
A：日本人や日本文化に対する新鮮な見方・考え方	17
B：異文化に対する理解	15
C：よく考えられたスピーチの内容	9
D：他国と日本の比較	8
E：訴えかけるプレゼンテーションのうまさ	5
F：感動できる内容	4
G：即興性・ライブ感	2
H：お国柄が出る服装やいでたち	1

（n ＝18）

に期待していること、という質問に対して、「日本人や日本文化に対する新鮮な見方・考え方を知る」や「異文化に対する理解」という回答が圧倒的に多かった。選択肢にあった「流暢な日本語」「指導している先生の力量」「主催者や主催地のカラーが出るような演出」「日本人の弁論大会にあるような抑揚のはっきりしたスピーチ」を選んだ回答者はいなかった。

以上のことから、外国人に日常的に接していて、かつ日本語教育に触れている日本人の大人は、日本語スピーチコンテンスとでは、スピーチの内容に重点をおいており、中でも日本をどのように見ているかを知る機会と考えていることが傾向として明らかになった。

主催者である団体も、聴衆である市民も、外国人のスピーチを通して、自分たちの社会を見る新しい視点を得ようとしている。また、外国人が背景として持つ文化を知ったり、日本と比較したりというスピーチの内容に期待している。外国人の目から見た日本社会の問題点の指摘も含めて、自分たちをどう見ているのか、に興味が集中しているように見受けられる。

一方で、今までの結果からは、すでに当該の市や県で生活者、あるいは市民として生活を営んでいる参加者の経験や提言を、地域社会の課題や問題と捉えて、問題を解決しようという態度がどうして見えてこないことが大きな課題であると考える。

5．新しい日本語スピーチコンテストの動き

在留外国人数が日本で３番目に多い愛知県は、「国籍などの違いを超えて相互に理解を深め、すべての県民がともに地域づくりを推進していく必要がある」という認識のもと、毎年11月を「あいち多文化共生月間」と定め、多くの行事を集中的に行っている。

特に、今年度からは「外国人児童生徒による多文化共生日本語スピーチコンテスト」をスタートした。この大会の趣旨・目的は、愛知県が多文化共生社会づくりを目指していることを前提に、「愛知県には、日本語がまだ上手に話せない外国につながる子どもたちがたくさんいます。そのような子どもたちも、もっと日本語が話せるようになれば、友達が増えたり、将来の夢が広がるかもしれません。」と設定している。テーマは自由で、例として「将来の夢」「がんばって覚えた日本語」が挙げられている。

審査内容も応募の段階から明示してある。

この日本語スピーチコンテストは、多文化共生社会が政策として浸透しているオーストラリアの初等・中等教育でも盛んに行われているコンテストのスタイルであると考えられる。

オーストラリアでは、成人移民のための英語学習プログラム（AMEP: Adult Migrant English Program）があり、オーストラリアに到着して間もない移民を対象に、日常生活、または就職において必要とされる英語

表４　愛知「外国人児童生徒による多文化共生日本語スピーチコンテスト」の審査内容[7]

観点	項目	審査の観点
日本語能力	語彙・表現 文法	使っていることばや言い回しが正しいか？ 主語、述語、目的語などの使い方が正しいか？
論旨・論調	構成 意欲 客観性	自分の思いや考えが伝わってくるか？ 未来に向かってがんばる姿勢が伝わってくるか？ イメージだけでなく「なぜそう思うのか」が伝わってくるか？

※コンテスト本番では「発音・抑揚（イントネーション）」や「態度（話し方）」も確認

能力を養成するため、最高で510時間の英語学習機会を提供するプログラムが提供される。また、全国どこからでも利用が可能な通訳・翻訳サービス（TIS: Translating and Interpreting Service）が24時間、130 以上の言語と方言に対応して受けられる環境にある。

また、オーストラリアにやってきた移民たちは、かなり手厚いケアを受けることができる環境にある。また、コミュニティ関係委員会・シンポジウムなどの機会を通して、自分たちの主張や提案を直接、市や州に訴える機会を与えられている。

愛知県でも、「外国人県民」という用語を使いながら、多文化共生社会を目指す方針を強く打ち出している。今回の「外国人児童生徒による多文化共生日本語スピーチコンテスト」もその流れの中に位置づけられ、前章で考察した他の国内日本スピーチコンテストは異なる、画期的な取り組みである。

つくば市国際交流協会も、「日本語であそぼう」というイベントで、外国人居住者に対する日本語や日本文化に触れる機会を提供すると共に、日本語学習の意欲を促進するようなディスカッションのイベント[8]を実施したり、2013年からは市民としての外国人から、地域社会について日本人と話し合ったり、質問をしあったりする機会を設ける試みを実施している。

以上のような、新しいタイプの日本語スピーチコンテストの動向は、他の国内の日本語スピーチコンテストにも影響を与えることが予想され、今後の展開が期待される。

6．まとめ

本稿では国内外で年１回程度の頻度で多様な日本語スピーチコンテストが実施されていることを報告し、それぞれの課題について考察した。コンテストの参加者にとってどんなメリットがあるのか、を分析すると、海外における学生対象の日本語スピーチコンテストのように、学生の就職につながるような要素が大きくはない国内の日本語スピーチコンテストは、参加者にとっての出場するメリットがあまり大きくないのが現状であることがわかった。審査基準の公開についても、差が大きいことも明らかになった。

課題の焦点は、参加者・主催者、そして聴衆にもプラスになるような仕組みで、日本語スピーチコンテストを企画することにある。特に、国内での日本語スピーチコンテストは、外国人居住者を地域における「一時的なお客さん」のようにとらえ、日本人一般市民の国際交流と国際理解のためのイベントとして実施されるような印象を受けた。

日本の社会の動向を考えると、外国人の定住傾向は今後ますます強まることが予想される。日本国内に中長期的に滞在する外国人は年々増え、2014年末現在における在留外国人数は212万1,831人となり、前年末に比べ、５万5,386人（2.7％）増加している。

定住した外国籍の人たちを、どのように呼んだらよいのかも課題のひとつである。

地域の国際交流協会は、地域に中長期に滞在する外国人の日本語環境、日本語教育環境の現状をさらに詳細に把握する必要があるのではないか。オーストラリアやアメリカといった多文化共生社会の先輩の事例を検討しながら、地域でできるサービスを考える時期に来ていることは間違いないだろう。

今後は、日本語教育環境・日本語環境という視点で、地域の行政サービスや国際交流協会の動向を調査していく。

註

1　CIS 諸国とは、独立国家集合体 Commonwealth of Independent States の略で、ソビエト社会主義共和国連邦を構成していた15か国のうち、数カ国を除いた国で構成され

ているゆるやかな国家連合体を指す。

2　2012年の国際交流基金の日本語教育機関調査結果の結果。

3　国際交流基金や日露青年交流センターなど。

4　ロシアおよびCIS諸国内で実施される14の予選会のこと。各地で、当該年の4月ごろから10月半ばに実施されている。

5　茨城県国際交流協会に登録されている市単位の交際交流協会等の年次事業から調べ、存在していることを確認した。

6　2015年7月23日茨城県内で日本語ボランティアをしている方を対象に実施。

7　2015年「外国人児童生徒による多文化共生日本語スピーチコンテスト」チラシより。

8　金久保・小野寺（2011）に詳しい。

【参考ホームページ】

愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室　2015年10月17日　参　照　http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html

一般社団法人国際教育振興会　2015年10月17日参照　http://www.iec-nichibei.or.jp/

公益財団法人茨城県国際交流協会　2015年10月17日参照　http://www.ia-ibaraki.or.jp/kokusai/index.html

【参考文献】

・金久保紀子・小野寺志津（2011）「つくば市におけるディスカッション型日本語コンテストの試み」日本国際理解教育学会　第21回大会予稿集

・北尾倫彦（1991）『学習指導の心理学－考え方の理論と技術－』有斐閣

・成田高宏外3名（2010）「「ロシア極東・東シベリア日本語弁論大会」における審査基準作成」『国際交流基金日本語教育紀要』　6号 pp 91-108

・土岐　哲（2001）「日本語のスピーチ教育」『日本語学』20（6）　pp.6-10

・林　里香（2010）「留学生の口頭発表クラスにおける聞き手の役割」『授業実践開発研究』千葉大学教育学部　授業実践開発研究室 pp.53-61

・深澤のぞみ・陳　会林・張　　鵬（2012）「日本語教育におけるスピーチ指導の可能性－全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の参加校の取り組みを例として－」『応用言語学研究論集』5　pp.16-41　金沢大学

・深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子（2012）「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」『金沢大学留学生センター紀要』15　pp.25-43　金沢大学

・福田　昇（2013）「スピーチコンテストにおける評価方法」EIKEN BULLETIN vol.25, pp 127-143

・藤岡典子（2009）「スピーチコンテストでの評価が果たす役割：文化項目評価の作成過程を通して」『国際教育評論』6，pp.1-12　東京学芸大学

・文化庁文化部国語課（2014）『平成26年度　国内の日本語教育の概要』